

お別れの言葉

泰雄さん、十一月九日の夜、洋子さんからの電話で君の突然の訃報を知らされた時、余りの衝撃に息がつまり、言葉をなくしました。ご葬儀の日程を聞きながら、余り現実感がなく、心が宙に浮いたまま、虚ろな返事をしていました。しばらくしてから、永くて辛かった君の闘病生活を思い起こして、何とか君が亡くなった事を自分で納得出来る様に、思い直そうとしています。

十六年前、自由が丘のジムでのクモ膜下出血が、最初に倒れた時でした。車椅子の生活ながら、それ迄の生活の質とスタイルを変わりなく続けるという、君たち夫婦の強い意志に、感心させられました。

私達共通の楽しみである合唱も続けて、毎年のコロロの榛名演奏旅行にも参加出来ていました。打ち上げの久呂温泉では、男性全員で君を担いでお風呂に入り、君の裸に群がって、シャンプーと石鹸で全身を泡だらけにしましたね。その拳句に、大マグロになった様を君を担いで、お風呂の中に、ドボンと放り込む事が、この旅行の大事な行事にまでなっていました。あの時の君は、半泣きの笑顔で何度も「もう止めろよ」と怒鳴っていたけど、半分は「止めるなよ」と言いたげな顔で、とても幸せそうでした。同じ事を、私達二夫婦で行ったハワイ旅行でやろうとしたら、周りのアメリカ人の女性連が、優し

く君の体に手をかしてくれて、どうも君はそちらの方が、荒っぽい男仲間の扱よりも、もっと嬉しうで、少しばかり、男同士の友情にひびが入りました。

未だ、君が元気だったころは、コーロの母体となった、スコラの合唱団を、今日も来ている五人の仲間であち上げて、折々の季節の呑み会を、ビア・アーベントと称して、洋子さんの大活躍の下、君の家で楽しく長い夜を、過ごしました。

あのよ様な、平穏な普段の生活が続くと思っていたら、八年前、スコラの練習で気分が悪くなり、二度目のクモ膜下出血がありました。丁度、練習の休憩時間だったので、手際よく救急搬送が出来て、この時も、大手術を頑張り通して、無事、家に戻る事ができました。さすがに、二度目の後は強気の君達も、多少は控えめな生活を、と考えた様でした。とはいえ、永年続いてきた仲間同士の付き合いに変わる事はなく、合唱の練習見学をした後は、必ず呑み会に出席して、真っ先に自分の好きな食べ物に手を出して、皆の颯感をかっっていました。

年に何回かは、二夫婦で小旅行もできていました。が、君の衰弱が目に見えて進んでしまい、最後の住まいとなった蒲田の介護ホームに入ってから、楽しい時間を一緒に過ごす機会も少なくなり、この間、十六年間に亘り、君の看病と介護をしてき

た最愛で最強のパートナー、洋子さんは、常に明るく、前向きに、変わらぬ愛情とパワーで、君を支え続けてくれました。

思えば、君と僕とは、大学の楽友会に入会した十八歳の頃からの付き合い、洋子さんはその一年後に入会して来て、淑子はその又一年後、二夫婦の間で、全員が五十年を超す、濃密な交友を続けてこられた事について、心から感謝しています。

君の穏やかで優しい性格は、私達夫婦だけではなく、周りの多くの合唱や慶応の仲間、麻布のラグビー仲間、教会の仲間、その他、君と関わった大勢の社会人・経営者としても、立派な人生でした。思うに任せなかつた経営環境の激変の中、親子二代で心血を注いだ、みくに製菓を廃業するという、苦渋の英断を行い、自分の愛した事業を肅々と閉鎖するという苦勞を、立派にやりとげられました。その過程で、会社が愈くなる社員の転職に、何よりも一番頭を悩まして、苦勞していた様子には、心から頭がさがりました。普段の穏やかで幸せそうな様子からは想像出来なかつた、君の深い哀しみと、社員に対する深い愛情を思い、私まで肅然とさせられました。

泰雄さん、君は十六年間、立派に病氣と闘って、生き抜かれました。七十三年の豊かな人生を、周りの皆を愛し、愛されて、生き抜かれました。素晴ら

しい奥さんと、三人の子供達、四人の孫たちに恵まれ、君達二人から、輝かしい未来を築く、頼もしい若い命と精神が生まれました。もう充分頑張りました。この後は、天国で神さまから「ご苦労様」と、やさしい労いのご褒美を頂きましょう。安心して、お休み下さい。君が下さった、愛情と不屈の魂、そして、「もう止めろよ」という、あの嬉しそうな半泣き顔も、永遠に私達の心に残っています。有難うございました。そして、お休みなさい。

平成二十八年十一月十五日

友人代表
池田龍亮